

イギリス新型コロナウイルス審議会による パンデミックの経験談収集プロジェクトの紹介

概要

本稿は、イギリス新型コロナウイルス審議会(UK Covid-19 Inquiry)による、新型コロナウイルスパンデミック下イギリスでの個人の経験談を収集するプロジェクト「一人一人の物語が大切だ(Every Story Matters)」の要約版報告書 2 篇の紹介である¹。この審議会は、イギリスにおける新型コロナウイルスパンデミックへの対応とパンデミックがもたらした影響を調査し、将来のための教訓を得ることを目的として 2023 年 6 月に始まった独立系公的審議会である。本稿で取りあげるのは、医療体制に関する体験談をまとめた報告書と、ワクチンと治療薬に関する体験談をまとめた報告書である。審議会の調査は複数のモジュールによって構成されており、医療体制についての調査はモジュール 3 に、ワクチンと治療薬についての調査はモジュール 4 に該当する。

「一人一人の物語が大切だ」プロジェクトの概要

- 「一人一人の物語が大切だ」は、新型コロナウイルスパンデミックがイギリス全土に与えた影響を幅広く把握するため、人々の経験談を収集する取り組みである。
- 寄せられた経験談は匿名化の後に分析され、共通テーマごとに ESM レコード (Every Story Matters Records: ESM Records)へとまとめられる。
- ESM レコードは各モジュールの証拠として用いられ、関連する公聴会で提出されたのち審議会のウェブサイト上で公開される。
- 経験談はオンライン(everystorymatters.co.uk)、イギリス各地の市町村で行われた予約不要の対面イベント、特定のグループを対象にした調査で集められた。

¹ ‘Every Story Matters: Healthcare – In Brief’, 9 September 2024, <https://covid19.public-inquiry.uk/documents/ever-story-matters-healthcare-in-brief/>; ‘Every Story Matters: Vaccines and Therapeutics – In Brief’, 14 January 2025, <https://covid19.public-inquiry.uk/documents/ever-story-matters-vaccines-and-therapeutics-in-brief/>.それぞれの調査のより詳しい概観と寄せられた体験談の全記録(ESM Records)には次の URL からアクセスできる。 <https://covid19.public-inquiry.uk/ever-story-matters/records/>.

医療体制に関する経験談

● 患者や遺族の経験

➤ 医療へのアクセス

- ◇ コロナ感染を恐れた結果として病院に行くのを先延ばしにしてしまい、病状（コロナもコロナ以外も）が悪化する事例が多かった。
- ◇ 救急車の手配やかかりつけ医との連絡などあらゆる段階で遅れが生じがちで、医療サービスの利用は孤独な経験だったという声が多かった。ただ、医療ケアにアクセスできれば、医療従事者が疲労状態にあったにもかかわらず、高水準で共感的なケアを受けられたケースが多かった。
- ◇ 特別なニーズを持つ人は医療ケアへのアクセスがとりわけ困難だった。たとえば、聴覚障害を持つ人はマスクやフェイスカバーの着用によってコミュニケーションが妨げられた。
- ◇ パンデミック以前と比べて医療ケアが不親切でアクセスしづらいと考えて代替的な選択をする人もいた。たとえば、病院ではなく自宅で出産することを選んだ女性がいた。

➤ ケア体制の変化

- ◇ 終末期ケアでは、面会制限のせいで家族や親しい友人が最期を看取ることができず、罪悪感や悲しみが長く続いた。
- ◇ 出産などほかの医療行為でも面会制限があり、患者とその親しい人々が強い孤独や不安を感じる事例が多発した。

➤ コロナ後遺症(Long Covid)

- ◇ コロナ後遺症は今でも多くの人に大きな影響を与えている。後遺症に悩む多くの人が怒りや不満を表明した。彼らに向けたケア体制も作られたが、一貫性がなくアクセスしづらかった。

➤ 自宅隔離(Shielding)

- ◇ 感染症リスクの高い人々は長い間自宅待機するよう要請され、日課も人付き合いもできず、孤独や不安を感じていた。

● 医療従事者の経験

- パンデミックの間中、多くの医療従事者が通常の業務範囲を超えて非常に困難な状況下で働いていた。それにもかかわらず、パンデミックの初期には医療従事者の間に共通の目的意識があった。

- あらゆる現場の医療従事者が、自分たちと患者を守るために必要な個人用防護具(PPE)の確保が難しかったと語った。
- 長時間労働、患者の苦痛や死、業務体制の変更などによって多くの医療従事者が心身共に疲弊した。一部のスタッフは十分なサポートのないまま生死に関わる困難な倫理的判断を迫られた。加えて、医療従事者のコロナ感染が士気と勤怠に影響を及ぼし、残されたスタッフの負担は一層増加した。
- 肯定的な側面としては、パンデミックを契機に新たな技術や手法が医療体制全体で導入された。
- 多くの医療従事者にとってパンデミックの影響は今もなお継続している。
- 政府の方針と支援について
 - 医療体制の準備不足が混乱を招き、とりわけパンデミック初期には医療従事者と患者の双方が怒りや不安を感じた。
 - 防護具の不足や不十分な検査体制が特に問題だった。
 - ガイドラインが頻繁に変更されたために現場での運用が難しくなり、混乱が起きたという医療従事者の声があった。また、一貫性のない対応のために患者やその家族が不信感、不公平感を抱く場合もあった。
- まとめ
 - パンデミックは患者やその家族、遺族、医療従事者の生活を大きく変える出来事となり、その影響は今もなお続いている。人々はパンデミックへの対応がイギリス政府やイギリスの医療体制に対する信頼を損ねたと語った。
 - 医療体制の準備や管理が不十分だったという指摘が広くなされた。指針の頻繁な変更や医療現場ごとの対応のばらつきによって患者対応が不公平で混乱したものになり、医療従事者の負担が増加した。同時に、困難な状況下で医療従事者が懸命に力を尽くした事例が数多く報告された。
 - 多くの人が、イギリスの医療体制がいまもなお抱える種々の問題によって次のパンデミックに十分に備えられないのではないかと危惧していた。

ワクチンと治療薬に関する経験談

- 公的なワクチン関連情報の提供について
 - 多くの人がテレビや SNS でワクチンの存在について知ったと語った。とりわけ基礎疾患を持つ人や高齢者などリスクの高い人はワクチン開発に安心感を覚えた。パンデミック以前の日常に戻れると期待した人もいた。

- 一方、ワクチンが短期間で開発されたことに不安を覚え、安全性や副反応を懸念する人もいた。
- ワクチン関連の公式発表の明確さについては意見が分かれた。接種の優先順位についてはわかりやすかったという意見が多かったが、有効性と安全性に関する発表には問題があったとする声があった。特に基礎疾患を持つ人は持病とワクチンの関係についてのより詳細でわかりやすい説明を求めている。
- 視覚障害のある人や非英語ネイティブの人には情報が十分に届いていなかったという意見があった。宗教上の理由から接種に不安を感じる人もいた。
- **妊娠、授乳中の人に対する指針について**
 - 妊娠中、授乳中の人には接種を避けるようにという当初の公式発表が途中で変更され、説明不足だと感じた人が多かった。
- **メディア上のワクチン情報について**
 - 権威ある伝統的メディアが報じるワクチン情報を信頼する人がいた一方で、政府方針に従って接種を促す報道ばかりだと不信を持つ人もいた。結果として伝統メディア以外のソースに情報を求めた人もいた。あまりの情報量にワクチン関連のニュースを見ること自体をやめてしまう人もいた。
- **ソーシャルメディア上のワクチン情報について**
 - ソーシャルメディア上にはワクチンの副反応に焦点を当てたネガティブな情報が多く、多くの人がそれを信用していないと語った。一方、伝統的メディアが報じていない内容を知ることができるという理由で SNS の情報を肯定的に評価する人もいた。また、SNS を信用していない人でさえ、SNS 上の情報が自分の接種判断に影響を与えた可能性があると言った。
- **そのほかの情報源について**
 - 多くの人（とりわけ基礎疾患のある人や妊娠中の人）にとって医療に関わる専門家が重要な情報源だった。かかりつけ医(GP)から詳しい説明があればもっと接種の判断がしやすかったという声があった。ワクチン接種会場での説明は肯定的に評価されたが、接種の直前では遅すぎるという意見もあった。
 - 多くの方は支援グループや宗教コミュニティ、自分自身での調査から情報を得ていた。身近に医療従事者がいる人は彼らから情報が得られて助かったと言った。一方、世代間で意見の相違が表面化したという声や、家族間で接種に関わる圧力があったという声もあった。

- 接種するかしないかの判断について
 - 多くの人は接種するのが当然と考え、迷わず接種したと語った。ただし、中には長い時間考えてから接種を決めた人や、追加接種を悩んだ人もいた。
 - 接種しない理由が特にないからという理由で接種した人もいた。自分と身の周りの人を守りたいという理由から、あるいは政府と専門家の判断を信頼して接種した人もいた。同時に、社会的圧力から接種せざるを得なかったと振り返る人もいた。
 - 医療、介護の分野で働く人の中には職場の方針で接種を決めた人もいた。その中には雇用主からの圧力を否定的に捉える人もいた。
 - 接種をためらった人や接種しなかった人の多くは安全性への懸念を理由として挙げた。過去の差別の歴史から政府や医療体制自体を信用していないと語る民族的マイノリティの人もいた。
 - ほかに、自分はリスクが低いからワクチンは不要だと考えた人や、ワクチンの有効性に疑問を持った人、あるいは政府や医療に不信を持って接種しなかった人がいた。
 - 一度接種を決めた人は追加接種も受け、最初に接種しなかった人はその後も接種しない傾向にあった。ただし、一回目の接種で副反応があったり、時間の経過と共にコロナへの不安感が薄れたりして追加接種を断った人もいた。
- ワクチン接種開始時の経験
 - 多くの人が接種の優先順位は妥当かつ合理的に決められていたと語った。一方、早く接種した人ほど副反応や長期的影響のリスクが大きくなることを懸念する声や、エッセンシャルワーカーの家族や基礎疾患のある人の家族への接種が遅かったことを疑問視する声もあった。
 - 多くの人がワクチンの予約システムはわかりやすかったと語った。ただし、非英語ネイティブの人や視覚障害者、農村地域の人々は困難を感じていた。接種会場の利用に関しても多くの人がスムーズだったと語ったが、特別な配慮が必要な人はここでも困難を感じていた。
- 一回目接種後の経験
 - 一回目のワクチン接種後に興奮や希望を感じたという声が多くあり、ワクチン接種をパンデミックにおける前進の象徴と捉える見方が強かったことがわかる。一方、社会的圧力などによって仕方なく接種した人の中には後悔や恐

怖を感じたという声があった。

- 軽度の副反応としては、腕の痛みや発熱のようなインフルエンザの予防接種と同様の症状が多く見られた。
- 血栓や偏頭痛などの深刻な副反応を経験した人もいた。中にはその結果として経済的困窮に陥った人もいた。
- 副反応について十分な説明がなかったことに怒りや不満を覚えた人もいた。

● 基礎疾患のある人向けの治療薬について

- 基礎疾患のある人の中には治療薬の存在を認識していた人もいた。その多くは NHS（イギリス国民保健サービス）や政府の発信、地域の支援グループから情報を得ていた。
- 治療薬へのアクセス状況は人によって様々だった。Test and Trace（検査、追跡サービス）から連絡が来たり、あるいは自分から NHS に連絡したりして治療を受けられるかどうか評価してもらった人がいた。治療を受けた後は症状が軽減したという声があった。
- 一方、自分が治療薬の対象かわからず戸惑った人もいた。各所で異なる説明を受けて混乱するケースもあった。身近な人が同じ症状で治療を受けられたにもかかわらず自分は受けられず、一貫性のない対応に憤った人もいた。

（鈴木英仁 京都大学大学院文学研究科／日本学術振興会）